

GR
白雲神 とりお



21

昭和47年1月1日



古川大航老師 御染筆

表紙画の説明

表紙の画は、救世観音の堂宇内の二階の壁に入れたステンドグラスです。大きいのは(巾二・四米高一・三米)中央大ドームに三枚、小さいのは(巾一・二米高九〇米)両側のドームに三枚づつ押入してあります。

私は中近東以西の回教、キリスト教等の寺院を見物した時あまりにも美麗なステンドグラスでうづまって居るのに魅せられました。

其の後池袋などのステンドグラスで飾られて居る、喫茶店を見て歩き御陰で大分コーヒーを吞まされました。

是を仏教寺院に駆け込む様に構図したのですが、おかしくないとの批判にほつとして居ります。

「人の一生は塞翁の馬の如し」とか「吉凶は糾へる繩の如し」とか云われて居る如く、楽しい日ばかりではありません。併し、自分程不幸な者はないと常に不平を云って居る気の毒な人も多いのです。

戦国時代の英雄山中鹿之助は「憂き事の、尚此の上につきもれかし、限りある身の力ためさん」と云う古歌を實踐して苦難が身にふりかかると「天が吾に与え

られた試練である」と感謝して、無限の勇猛心を起したと云ふ話があります。此の様に災を転じて福となし得てこそ「日々是好日」となります。

日本は産業の驚異的發展等「日々新」なる世想に対し、人間も是に順応しなければ時代に乗り遅れます。それには先づ毎日を感謝して希望に満ちた明るい生活をすれば「なえるなわ」の二本共幸福にする事が出来て「日々是好日」となるでしょう。



表紙画

大竹ステンドグラス製作

表紙裏「日々是好日」とステンドグラスの説明

目次 (とりゐ一月号) …… (1)

我家のお正月の思い出 …… 桐江 …… (2)

印度附近の旅路 (其十二) …… 桐江 …… (4)

道光禪師 (其四) …… …… (9)

西遊記 (其十六) …… 岡部千三 …… (13)

謹賀新年御芳名 (十六頁)

田舎医者 …… …… (17)

老万體観音奉納御芳名 …… …… (20)

盛大に挙行された救世観音落慶及一万體観音奉安式 …… (22)

裏表紙 鳥居観音地図

祈禱会と春の行事



我家のお正月の思い出 桐江

新年お目出とうございます

私も八十才の馬齢を重ねますと、昔の思い出が、こよなく、なつかしくなつて来ます。大晦には、夜十一時頃、夫妻で約一キロもある山上の鳥居観音（今の大黒殿）に懐中電灯を頼りに、十センチもある霜柱を、ザクザク踏んだり雪にすべったりして、ムササビ（モモンガー）の狎高い鳴声に驚きつつ登るのです。お堂に着くと先づ香を炷き観音経を唱えつつ、百八の鐘を鳴らします。そして草木もねむるような静寂さに、心も澄み渡る中で、先づ此の一年間、観音様の御加護により、恙なく過し得た事を感謝し、続いて来るべき年を如何に過すべきかを自問自答しつつ観音様の御加護をお祈り致したものです。今は本堂も山麓に出来、孫の宏之が引きつづきおつとめを致しております。

私は青少年の頃、大晦には真夜中に、先づ子の権現にお詣りして一番護魔を挟き、続いて、天王山（竹寺）時には高水山迄足をのぼして裸詣りを続けたものです。

此の三ヶ所を廻るには、四時間位かかるので、いねむりし乍ら歩く事もありました。

帰宅後、弟妹等と近くの神社参りをします。先ず歳神様、お日様、氏神様、お諏訪様等、十ヶ所位に一銭銅貨を半紙でおひねりを作り奉げたものですが之は今でもつづいてやってくれております。この神詣が終る頃には、歳神様の祭段の前には、沢山のお膳が並んでおります。男は紋付袴、女も盛装して家族一同打揃い「お目出度うございます」と挨拶をして、赤い大きな三ツ組の盃で屠蘇を祝ひ、お雑煮に飛びつきます。私は餅五個がせいぜいですが、二十以上も平らげた豪の者もおりました。満腹した頃になると、子の権現から頂いた各自の「おみくじ」に喜んだり悲観したりしたのも思い出の一ツです。食べ残した口取りは他の者に食べられないようにと、よせものに箸で名前を書いたり、ツバキをつけるまねしたりふざけたものです。

正月二日は、仕事始めです、数十人の使用人が、新しい印裃天姿で、恵方の山で仕事始めをしてから、

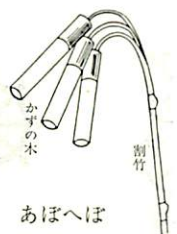
四斗樽をあける程酒をのみ、歌と踊りで、われるよう
なさわぎです。

昔は三ヶ日は年始廻りの客が来て之に一々お酒、雑
煮を出すので家族はいそがしい正月でしたが、昭和に
なつて神社の庭に集つて祝ひ合うように生活改善され
助かりました。

元旦の早朝に、若水を汲んでおき之をすべての煮物
等に使うならわしました。

七草には、歳神様の前で俎に七草をのせ二丁の包丁
で「七草なづな、唐土の鳥が、日本の国に渡らぬ先き
にストロコトントン」と大声で歌い乍ら包丁で俎を、
たたく音が、今だに耳に残っております。

七草が過ぎると「カズの木」と云うやわらかい木で
「アボヘボ」と云うものを造り之を割り竹にさして、



お粥を少しのせて門松を除いた
あとの杭にしぱりつけたり、歳
神様や、門口等に供えます。又
このカズの木で年長順に大きき
の違う箸をつくり之で食事をし

ます。お祖父さんの箸は大きくて、子供の私には使え
ないほどでした之は「数を増す木」と云う縁起からと
「長幼序あり」と云う意味からだと思ひます。

又十五日の小正月には「ツゲの木」に米粉や、きび粉
で造つた「おまゆ玉」（お団子）や密柑を挿したり色
々のものをつるして神仏に供えますが之は養蚕のため
のものでしょう。クリスマスツリーによく似ています。
この団子を焼いてつぶし砂糖醬油で食べると、中々
乙な味です。

又年末についた沢山の餅を大瓶の中に寒水を入れて
つけておくと春までカビが出来ず焼くと、とろける様
になり、あべ川として食べたものです。なかなか美味
で菓子のような時代には何よりのおやつでした。

名栗のような山国では、山の神様を大切にします。
初申には竹筒に酒を入れ籬で弓矢を造り之を山の神
様に納め、幟を立ててお祭をしますが子供の時分には
この弓矢がほしくて、式がすむと大急ぎで之をさげて
遊んだものです。

其他いろいろの行事をやつたものですが、時代は目
まぐるしく激変して、この様な昔ながらの行事は、漸
時うすらぎまして、今の若い者は之を知らぬ人が多い
でしょう。

併し今でも何等かの形でお正月の祝いをしない家庭
はないし又神仏に初詣する人が非常に多いのは、日本
民族の伝統を、ほこりとする現れでしょう。



印度附近の旅路

其の十一
桐江

アジャンタの仏教石窟寺院

三時間のデカン高原の旅情

十八日(月)今日は仏教の石窟寺院としては、印度で最も古く、且つ雄大な、アジャンタの石窟寺院を見学するため、オーランガバットを出發して、デカン高原を東方に自動車で三時間も走りました。

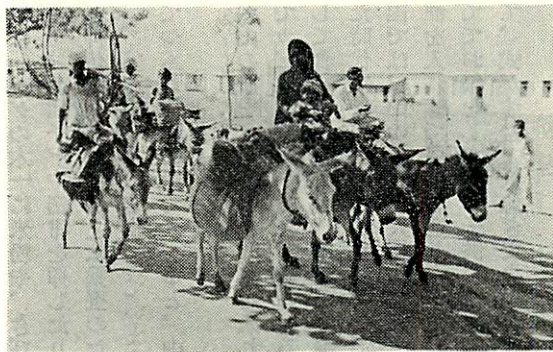
西部劇で見るような岩石や、シャボテンが群生している中に時々水牛の大群に出会いました。ところがこの水牛は、角の大きさや形が数十種もあり大きいのは一・五米以上もあるのや、曲りも皆変化しており角の見本市を見るようでした。これと同じく山羊の大群にも度々出会いましたが、是も大小さまざまでありまして、毛色や毛の長さ、模様等色々と変化しており、殊に角は角の見本市の様々色々の面白い形をしておりま

すが驚く事にはその角が五色の色で色々の模様が画いてあり実に可愛く美しいのです。

これはこのデカ

ン高原の雄大ではあるが、非常に単彫な色どりから来る自然の要求から角の芸術を自慢している趣味の現れで、旅行者を樂しませてくれます。

デカン高原の産物は砂糖キビとトーモロコシ、綿、等ですが水利が悪く全くの、お天気まかせという呑気



移動勞務種族の一家族

な農業です。農繁期で人手不足の時には、集団の労務者を頼む習慣があります。このため移動労務者の種族が居ることです。私の見たのは大家族の集団で十数頭の驢馬に世帯道具をつけて天幕も持参しており、一日に十数哩位づつ歩き夜は野営しながら目的地に旅をします。天幕の骨は三米以上もあるU字形の棒を沢山かついで驢馬にのっているのが珍妙に思われました。これは羊や牛等をつけて歩く遊牧の民とは違い家族ぐるみの移動民族ですが、日本でも、田植えの多忙な時は、年々頼む労働者があつたり、頼めば越後からでも米搗ぎに来たと云う風習と似ており、ます。然しこれも時代の波におされてだんだん変わってゆく事でしょう。

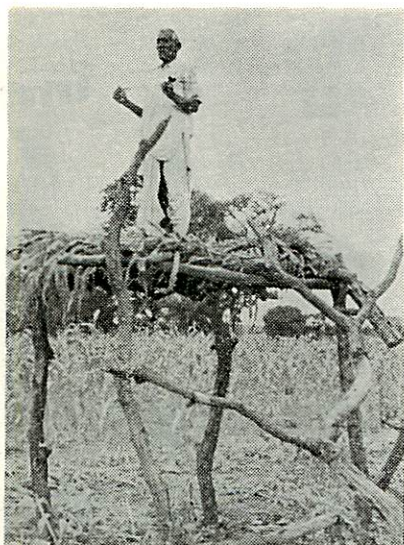
鳥 追 ひ

面白いのは鳥追いです。畑の中で三米位の木のヤグラを作りその上で鳥群を追うため「アオー〜」と大声をはりあげたり石モッコで鳥群に石を飛ばすのです。

この石投げは二米位のナワの中辺にこぶし大の石をのせ、ぶんぶんまわして一本のナワを放すと石は、とても遠くまで飛びます。土民は私共に実演して見せてくれました。



石もつこで鳥追の実演



鳥追ひの櫓（石もつこを持って居る）

私も子供の時に高い木の栗を落すため、この石もつこを使い。どなられて逃げた事がよくありました。

アジャンタの石窟群

デカン高原を東方に三時間位、自動車で行くと下り坂になりタフテー川に達します。

この川の馬蹄形に屈曲するところに沿った断崖の絶壁にそって二分の一哩の間にアジャンタの大小合せて二十九個所の仏教の窟院が整然と並んでいる様は実に壮観です。この窟院は、昨日見たエローラの窟院より古く、紀元前二世紀頃迄、約千年の間に掘鑿されたもので最も盛んな時には万余の仏僧が居たとの事です。

どうしてこのような山奥のジャングルの中に窟院が出来たかという、静かな仏教の修行場たる事、最も生活に大切な川水が利用出来た事や岩窟の中が酷暑を避け得る事等の理由からだ、との事です。

ところが一万余もいた僧が一人もいなくなったのは全くなぞとされております。その後千余年間もジャングルにおおわれて、ねむりつづけておったのです。

岩窟の発見

ところが千年もの間虎等出没する様なジャングルに



谷間の公園から見たアジャンタ岩窟の一部

おおわれて、世人が全く知らなかったのを、今から八十年前英人が狩りに来て、追って来た鹿が此所に近くと急に見えなくなつたので、不思議に思いジャングルの中に、わけ入つてこの窟院の入口を発見したとの事ですが、また一説には反対がわの山頂から見たら川向うの岩壁にアーチのようなものが見えたのでこれを発見したともいわれておりますが大部分土砂におおわれていたので、掘るのに数十年を要したとの事です。

然し其為め此の建築・彫刻・絵画の総合的な一大芸術が外部からの破壊を防いでよく保存され我々現代人を喜ばせており、一大観光地となっております。

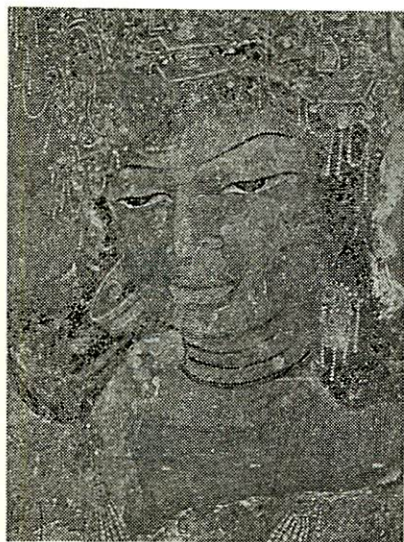
絢爛たる彫刻と壁画

各窟院は、大小ありますが大体、僧房七割、礼拝堂三割位の割合になっております。

其の壁面や柱等には、あらゆる仏教関係や、当時の生活、文化等の彫刻や絵画でうづまっておりますが又男女組合せの全裸体の官能的なものが相当見受けられますのはヒンズー教の影響かと思われまます。併し独身で煩惱を去る修業に専念しなければならぬ仏教僧に對し、何故にこのような挑撥的な絵や彫刻があるのかと不思議に思いますが、やはり国民性でしょう。



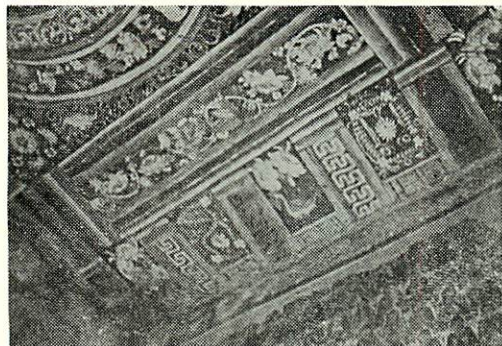
法隆寺の壁画



萬観飾のヨークをつけた印度婦人壁画

併し、この岩窟の特長は他に比類のない、完全な壁画がよく保存され居るので名高いのです。

此所の壁画の画きかたは、鉄分の含んだ岩石の上に牛糞と糲殻をまぜて塗り、その上に石灰を塗った上に六色の絵具を以て画かれて居るとの事ですが、千年余も外氣を受けなかった事も、立派に保存された原因と思われます。



自由奔放に画かれた天井画

殊に婦人画は美しく、法隆寺の金堂の壁画と良く似て居て親しみがありますが日本と印度が千数百年前の同時代によく似た画が画かれて居るのも、人間の知識の推移が窺われて興味があります。天井画は、日本の正方形の「格天井」とは違い、自由奔放に区画されて居り、且つあらゆるものを見事に

美しく画き出して居るのも印象的でした。

一例を示すと、丸形の天井に円形に画かれた數十匹の家鴨が全部違ったポーズで画いてある如く、凡て、金と時間にとらわれず、千年の間彫ったり画いたりした努力の跡がしのばれて興味津津たるものがあり、一通り見るだけで、数日はかかると思はれるのを僅か半日で素通りしたのが心残りがします。

或る洞窟内で印度の画家が、壁画の修復に画筆をふるって居るので之を写真を写した処、出来たら是非送ってくれと頼まれましたが、光度が足らなかったためか、写真は失敗して居りました。

岩窟の下の谷間の川附近は公園となつて居りまして熱帯植物の花が咲き乱れ岩窟とよい対照でした。



三信工業

- 一般建築
- 社寺建築
- 美術造形
- 設計施工

杉並区永福町二一—一
電話(三三二二)九五五一



道光禪師（故高階瑞仙貌下）

御法話（瑞仙いかだ集より）

（其四）

（十四）禪の宗意から仏教を話す

（一）

日本の仏教の宗旨は十余りありまして、導くところの数義も、異なっています。大別しますと、聖道門と浄土門とになります。禪宗は聖道門、浄土宗や真宗は、浄土門でありまして、自力本願、他力本願を主にしています。浮土門の他力とは、阿弥陀仏の力に救われて、成仏するといふ説き方です。

但し自力、他力といふ言葉は、聖道門に属する禪宗などから生れたものではなく、浄土門で説かれる他力に対する一面をいうたのです。そこで自力の宗旨に属する禪宗の立場からお話いたします。

釈尊のお言葉から生れた仏教が、自力、他力、にわかれても、帰着するところは一つです。たとへば、磨けば玉になる石があるとします。これを玉磨きの人に立派な玉に磨き上げられますと、即ち『他力』ということになります。併しいくら玉磨きの名人でも、炭団

のような凡石を、寶石には出来ません。つまり石そのものが、良い本質を持っていなければ、良い玉、即ち仏教でいう成仏は出来ません。自力、他力、とも必要になります。甘い干柿も、柿に本質がなければ、干柿にはなりません。他力の一面の自力が必要です。

成仏するには自力の本質をもっている各自に、大自覚を与へるのが、仏教の本領です。

大乘仏教の教旨は、お互の心の奥に、仏や神と変らぬ本質があり、それを自覚させるための指導です。

み仏の教えの道はとにかくに

清き心になれとこそあれ

の歌の通り、情い心に立ちかえる……ことが要領です。これを仏心とも、仏性ともいいます。

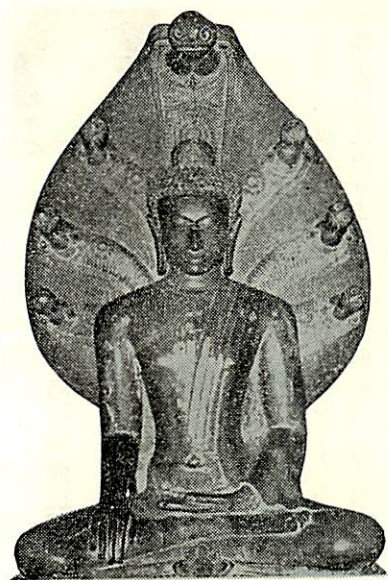
ここで、成仏という言葉についてお話ししましょう。

成仏とは、「仏陀になる」ということを略したもので、「覚者」即ち「覚った人」「自覚者」のことです。世間では、成仏を死んで仏壇に座ることだと感ちがいされる方がありますが、それは、死ぬことと、成仏を一しょにして、しかも死ぬことが嫌いなため、縁起が悪いと思ひ込んでいるからです。

成仏とは、仏陀即ち仏に成る言葉を略したもので、「覚者」即ち覚った人、自覚者のことでもあります。

自分の本来の姿、仏心に目覚めることで、これを成仏といえますので、この意味にとつて下さい。若し人たちに「自覚せよ」と言うとき、喜んでわかってくれますが、成仏と同意義であります故、理解して下さい。さて、成仏とは、大自覚者になることで、其模範者が、釈尊です。お釈迦様のことを、覚皇と申します。名右屋の覚皇山の名は、それからとつたもので、この釈尊の大覚に、誰もが導かれていく素質を、皆もつています。これが仏教であります。

コブラに飾られた釈尊像



(二)
仏教では心を真心と妄心に大別しています。真心とは仏心、妄心とは凡夫心でありまして、まづ妄心についてお話しします。

妄心とは妄想動乱の心のことで、散心ともいい、私たちは一日中欲しい、惜しい、可愛い、憎いなど動き通して、それからそれと走り際限ありません。

悲しいことにこの妄心を自分の本心だと思つて、心中では他人の心と衝突していますが、それは決して本心ではありません。もつと恐しいことに、妄想心が動く間に、危険性を生じます。釈尊の遺教経に「此心の恐るべきこと、毒蛇の如し」と申され、亦悪獸、怨賊の如しとも申されて、強く戒しめられています。

この凡夫心は自我の根性で、この我執を仏教では、煩惱心ともいい、信仰により必ず誰もが、自覚して、清い心を本心と覚ることが出来ます。猛毒をもつ印度のコブラも、お釈迦様には懐いたという伝説から、仏さまの周囲にコブラを飾りに用いてあるのも、釈尊が大覚者になられた立派な証拠であります。

人の感情が平和な時は、なんでもないが、一つ誤れば、新聞面の傷害、闘争などとなり、心の一面に存在する恐ろしい「妄心」を、戒しめたのです。

さて之に反し自我を捨て、無我の心、清い心を菩提心と申し、即ち「真心」です。この真心を超日三昧教に「世に処して虚空の如く、蓮華の水につかざるが如し、心の清浄なること、かれに超うる」とあります。

虚空即ち空間に、色をつけようとして、絵具筆を振り廻しても、色に染まりません。亦汚ない泥水の中に生える蓮華の葉や花が清浄な姿を保っている如く、真心の清らかさは、一切を超越した「清らかさ」であるというお経の教へです。お釈迦様が蓮の花を賞愛なさるのもそのためです。世間では、成仏と同様に、蓮の花を「ほとけ」くさく思つて毛嫌いする人がいますが、此の事をよくわかつてもらい、吾々も清い本心を持つていることを自覚せねばなりません。独立自尊の精神を起し、真心に生きるとき、自己の尊さが知られます。凡夫が転向して仏になるということも、この心があるからで、仏心とも自性清浄心ともいいます。

釈尊は四月八日にお生れになり、天地を指さされて「天上天下唯我独尊」とお仰せになりました。「天にも地にも己れ独り」の意です。つまり人類はを想心に支配されて、自身の尊さを忘れているが、ひと度真心に自覚すれば、天地の間に立つて、独尊的な価値をも

つている故、これを呼び覚まして、自覚者に導こうという一大暗示であることを理解せねばなりません。

これが仏教とキリスト教の教義と基礎を異にする処で、キリスト教は天国に生れかわることが救いです。そして神に仕へると教へ、神になるとは説いていません。ところが仏教は、極楽に行くと言ひましても、仏の小使いをするのでなく、人の貴い価値を見込んで、仏になるという人類の救済を説いています。ですから吾々は自我を中心にしたうぬぼれや慢心でない「正しい」自信力をもつて生きましよう。

月一つ もたぬ草葉の 露はなし
この句のように、人は、身分の上下、男女などの区別なく、成仏すべき真心という真如の月に恵まれています。この事を古歌に詠うてあります。

仏にも 神にも 人はなるものを
など仇にもつ 己が心を

仏の理想は、人類を自覚させて、仏心生活に浄化させようといふのであります。併し凡夫は、不純な汚れからはなれるのが困難で、そのままでは世の中が浄化できません。よく社会が悪化したなどいいますが、これは人心の悪化からきています。清浄の仏心に目覚めなければ、社会の浄化はできません。人々の心が仏心

に美化されれば、婆娑即ち現世も、寂光浄土即ち極楽浄化となり、凡夫の心から見れば汚れたこの世も、浄土として住むことができるのであります。

(四)

釈尊からずつと禅宗の系統で、二十八代目が達磨さまです。印度の方で、印度から支那(今の中国)へ禅を伝へたお方です。やがてのちに禅宗が二派(南頓北漸)に分れ、北の方の祖師を神秀禪師といい、お作りになった偈のなかに心の清かさがあらわれています。

その第一句は「身はこれ菩提樹」といい、お互いに誰もが成仏できる身であるということです。菩提樹は印度にたくさんある木で、一般には「ひつばら樹」といいますが、その木の下で、釈尊が坐禅をして、十二月八日の晩に明星の光を縁として、悟をひらき正覚を成就されたその事の菩提道といえますので、それを記念して菩提樹と尊んでいるわけです。

神秀禪師がいわれたのは、大自覚をすれば、皆仏になれるといふ意味です。その次の言葉に「心は明鏡台のごとし」といわれました。吾々の美しい淨らかな心は、磨いた鏡の如きものである。併し鏡の手入を怠ると塵がかかってくるように、人の美しい仏心も、妄心という凡夫根性にくもらされるから、修養を怠らな

いようにと、おさとしになっています。

沢水和尚の法語に「およそ心あるものは、心の養いなるべからず」とあります。

人は肉体の養いを知っているのに、食物衣類住居に気がつかっています、それと同時に心の養いを行わなければなりません。精神生活が根本である事は、ずっと前に「心と身体の著物」の項で申ました通り、心の修養をはなれて、肉体の生活は成立ちません。人は夫々工夫をして、仕事をし乍ら心を養う工夫を忘れないことを、仏法の信念というて居ります。

次に「信心とは、まことの心と書けり、まこととなりて 悪しというは一人もあるべからず」と申してあります。たとへば、非道を行った者が「これからは眞人間になります故よろしくたのみます」と言つて来た時、それがまことであれば異議を言う者はいません。ところが、信にも浅深がありまして、禅宗で信とは真心即ち心の底の仏心にかえることで、仏にも神にもなり得る本心の仏性に目覚めることが、信心です。

お寺の本堂や、お宮について拝むのは信心の手習いで、仏や神の前にぬかづく時の、清く正しい心持を、常に忘れずに、生活することが肚要で、信仰生活、宗教生活が実現するのであります。



賀 正

"	"	"	"	"	"	"	"	千代田区	青梅市	大阪市	"	羽生市	深谷市	名栗村	横浜市
谷本慶隆	西川春彦	西村博吉	小川孝重	与野敏夫	中村実	松本福男	桜田久	杉山慎	並木金一郎 <small>東光電気工事(株)</small>	牧瀬幸吉 <small>大阪いすゞ自動車(株)</small>	同節子	掘越一郎	持田高良	名栗支店 <small>鉦崎玉銀行</small>	岩本勝俊
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	千代田区	品川区
大友寿	南雲留男	北見晃	鈴木国仁	川島孝	藤卷正雄	上田丈夫	玉田勝太郎	河野宗治	横山昭司	菊地諫雄	石塚格	石井竜雄	杉山守	吉野賢一	重宗雄三
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	千代田区	渋谷区
中坪泰雄	金子芳雄	竹内保	岡野信一	山本泉	坂江満寿造	高木武	小川正三	富田佑	樋口孝一	田島盛雄	木本幹夫	竹本勝栄	真木常次	周防栄三	竹井博友



賀 正

浦和市	大田区	三鷹市	川越市	川里村	行田市	世田谷区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	練馬区	
山本博男	古筆丈夫	原藤春雄	会川達雄	滝沢秀夫	木村繁次郎	木村信	上野広治	白井一郎	小林英次郎	平野金次郎	柴田務	永沢敏男	甲賀寿男	矢島重五郎	深野文吉
〃	〃	名栗村	幸手町	〃	入間市	所沢市	〃	清水市	豊島区	中央区	練馬区	〃	浦和市	世田谷区	三鷹市
岡部敏	町田英二	鈴木喜市	三ツ林弥太郎	衆議院議員 杉山定太郎	榊山チエ子 株式会社	平仙レス 山崎操	松田承風	松田江畔	西山秀吉	代表 前田増三	蛇の目不動産 白井喜三郎	島田森雄	杉山義喜	今津政雄	堂城泰男
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	名栗村
新鉦工業株式会社	町田一男	浅見康夫	大久保義雄	原田久好	平沼清儀	加藤春松	岡部敏	町田兵太郎	佐野正助	岡部恒治	浅見福太郎	町田英二	町田真之亮	岡部千三	鋼管鉦業 武蔵野鉦業所

賀 正

浦和市	"	練馬区	鎌倉市	千代田区	川口市	"	"	中野区	板橋区	杉並区	板橋区	練馬区	中野区	所沢市	渋谷区
藤沢帝	鈴木梅子	鈴木真太郎	広瀬正子	広瀬元夫	永瀬一郎	高橋司郎	竹越梅子	出羽敏雄	塚田節子	佐藤篤子	小川弥吉	五十嵐敬子	所 はっえ	打木文	田沼登
飯能市	入間市	日高町	大宮市	川越市	川島村	坂戸町	鴻巣市	飯能市	"	上尾市	大宮市	東松山市	飯能市	"	浦和市
山川邦雄	大矢浩平	大川戸要吉	落合隆二	榎本 斌	斉藤賢吉	黒瀬滝治	森 正木	加藤育三	柴崎昌夫	兵頭陸雄	横溝喜久雄	千原 元	梶谷真一	藤沢秀夫	藤沢やす子
"	与野市	上尾市	浦和市	"	大宮市	浦和市	川口市	大宮市	吉見村	本庄市	熊谷市	深谷市	熊谷市	吹上町	浦和市
矢島繁	稲村喜美男	丸山久蔵	加藤洋治	川野博通	佐藤昇治	中村正夫	小林文久	黒田 明	新井和明	田口次作	橋本正勝	富田邦男	進藤俊典	根岸栄一	比留間豊夫



賀 正

栗橋町	大宮市	吉見村	行田市	浦和市	板橋区	新宿区	上尾市	鳩ヶ谷市	浦和市	戸田市	鴻巣市	"	大宮市	"	宮代町
白井一郎	常見武男	大山伯之	島田友五郎	星野謙三	天海秀夫	山沢隆一	大川長信	穴戸忠治	黒沢洋一	細井幹夫	久保田忠治	久保田真喜治	小島武夫	間庭正二	田中弘次
白岡町	"	菖蒲町	飯能市	与野市	大宮市	熊谷市	川越市	浦和市	大宮市	"	熊谷市	吹上町	与野市	"	"
斉藤幹雄	松本義勝	松本晃	平松正吉	岡部政雄	砂川誠也	井田四良夫	金野裕	後藤光夫	広田健司	小菅山博	手島昭晃	稻沢吉春	森幹一	正木三郎	井上正雄
与野市	熊谷市	行田市	嵐山町	毛呂山町	吉見村	川越市	羽生市	上尾市	加須市	菖蒲町	行田市	北川辺村	熊谷市	日高町	騎西町
井上正巳	佐藤寿夫	松岡潔	馬場恒次	吉田義孝	古杉孝行	関賢寿	岡田孝徳	若林二郎	島崎隆雄	福井精治	洪沢修	永塚正夫	三上仲三郎	嶋田保	浜野義文



賀 正

熊谷市	加須市	白岡町	深谷市	本庄市	羽生市	熊谷市	大田市	"	"	熊谷市	東松山市	加須市	行田市	加須市	騎西町
福原	酒井	大久保	綿貫	清水	清水	石黒	木村	茂木	齊藤	猪野	栗原	加藤	諸貫	新井	浜野
政明	吉彦	良一	富雄	光雄	栄	光治	泰久	晋二	辰雄	一夫	利男	清正	忠久	洋	ふく
"	大宮市	入間市	"	所沢市	大宮市	北本町	熊谷市	北本町	東松山市	上尾市	秩父市	野上町	寄居町	熊谷市	児玉町
望月	武田	小沢	吉田	藤野	小池	芳村	石田	小沢	新井	大滝	齊藤	小林	保泉	山口	茂木
盛隆	安弘	華一	猛	隆	康夫	寿久	征司	俊勝	徳治	孝	清	博	敏夫	素	俊雄
浦和市	大宮市	浦和市	"	新座市	草加市	蓮田町	草加市	"	浦和市	岩槻市	浦和市	福岡町	岩槻市	飯能市	大宮市
青山	黒須	花木	大久保	大久保	渡辺	新井	関	平石	小沢	石田	吉田	安田	古田	高野	工藤
富治	達児	孝	悦子	健治郎	友次	義男	留義	博勇	恒介	照男	明德	正吉	勝蔵	昌保	勝彦



賀 正

与野市	上尾市	浦和市	北本町	熊谷市	浦和市	三芳町	鴻巣市	川口市	"	"	浦和市	熊谷市	北本町	川口市	行田市
田中隆司	黒白享幸	高野貞夫	新井忠一	近藤七郎	見富貢	岡部亮介	村田征二	小国子利行	荻原工業株式会社	山崎一由	宮野孝	長谷川栄二	梅本福雄	高橋和夫	榎本富郎
与野市	品川区	東松山市	川越市	与野市	浦和市	"	大宮市	新宿区	川口市	飯能市	岩槻市	"	与野市	"	大宮市
堀栄二	田嶋勲	吉田憲太郎	榎伝蔵	柴山新之助	沖田忠	室田由雄 <small>大栄管理</small>	齐藤善政	桐木光三	大栄不動産 実戸紀一	真柄勇	吉田兵蔵	松本功	天野富雄	大邦商事	洗井モーターズ
"	新宿区	荒川区	与野市	"	"	"	"	目黒区	宇都宮市	目黒区	豊島区	目黒区	中野区	小平市	大宮市
竹村勝	竹村吉右衛門 <small>安田生命保険相互会</small>	北沢隆吉	桜井薫	道城正三	渡辺義之	相原米蔵	大場富士雄	若林五郎	神山義男	阿部正雄	西島達夫	今井豊子	浜崎国男	児玉雄吉	神田武



賀 正

狭山市	所沢市	小平市	北区	所沢市	神奈川県	中野区	世田谷区	渋谷区	千代田区	文京区	横浜市	千葉県	杉並区	中央区	
稲葉実	大西清	南方皓	清水一夫	斉藤長寿	小川義嘉	大竹勝弥	大竹竜蔵 <small>大竹ステンドグラス</small>	松田俊平	株式会社 渡辺綱雄	株和風堂	島田つね子	五十嵐奈美	桜沢もと	谷薫	升金照恵
川越市	"	"	"	"	"	"	"	"	中央区	豊島区	新宿区	"	"	兵庫県	
染谷清四郎	秋田新三	飯塚由利	榎野明	井上千寿	荒川安正	中島操	岩本光一	工藤侃	下村弥一	佐野友二	石村幸一郎	石原易	郡司みはる	郡司進	郡司茂
志木市	毛呂山町	熊谷市	国分寺市	川越市	飯能市	浦和市	大宮市	北本町	朝霞市	熊谷市	大宮市	蕨市	嵐山町	岩槻市	浦和市
宮岡猪夫	浅野洋	神庭清	今泉忠男	川崎俊也	宿谷文平	青木一栄	大山七郎	井野宏	武田正三	奈雲竹雄	吉田守生	磯野昶	篠藤正雄	今成政利	西川裕夫

賀 正

市川市	浦和市	保谷町	川里村	吉見村	練馬区	入間市	目黒区	世田谷区	"	"	"	千代田区	中野区	練馬区	千代田区		
原隆	中村善行	戸塚卓男	滝沢弘	大野陽之助	清水喜久雄	川島源次郎	広住温	前田安彦	富士倉庫運輸社長	作田徹也	石川芳雄	磯弁蔵	佐藤征捷	島田竜郎	山下照夫	下中邦彦	平凡社社長
"	"	豊島区	世田谷区	渋谷区	入間市	"	飯能市	坂戸町	大阪市	熊谷市	川越市	浦和市	墨田区	大宮市	川越市		
松浦松太郎	宮内巖	小島正治郎	木梨静野	山中竜渕	繁田甚三郎	平沼弘巳	平沼玉枝	原次郎	北武州瓦斯(株)	阪和興業(株)	鯨井文雄	福田増太郎	岡田亮治	山野辺行也	網野久一	小島俊雄	
"	"	横浜市	"	世田谷区	"	北区	"	"	"	"	名栗村	"	"	"	"	豊島区	
橋本良之	高橋延寿	内藤洽	小佐野定彦	小佐野郷子	遠山栄治	純実会	早稲田実業学校	原田亀三郎	觀世音センター株式会社	石井勲	岡部元治	鳥居觀光株式会社	長谷川正治	平山正文	宮下仁	馬場定治	

正 賀

練馬区	渋谷区	目黒区	豊島区	新宿区	"	"	"	大田区	"	"	世田谷区	"	"	"	横浜市
山下勉	黒沢長典	若林千夏	後藤輝明	野方武	鳥海豊俊	村田慶一	小西合三	藤塚義正	柴田正光	野村真弓	神山二郎	岩瀬章	金子光利	渋谷正二	済間袈裟俊
"	"	千葉県	富士見町	飯能市	鴻巣市	"	川口市	大宮市	町田市	立川市	小金井市	東村山市	北区	足立区	板橋区
三谷良彦	黒沢宏国	山田耕作	三村信篤	金子茂	吉田大成	秋山守	田口力	山崎浩	高橋正之	三浦惣市	平良涉	前原章	正部家三長	岩田政明	山本清
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	狭山市	富士見町	"	入間市	群馬県	千葉県
岡野真平	岸石炭店	小高はな	小高志げ	小高金三	小沢一郎	多加谷米	多加谷乙未	原田章一	小沢寿太郎	平山実	渋谷兼吉	萩野真吾	石井百蔵	福田正一	秋田昌彦

賀正

中央区	練馬区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	新宿区	
蛇の目 工業株式会社	平沼 杉之助	松崎 悦太郎	望月 貞夫	原 慶邦	富田 一郎	戸田 濟	佐々木 征一	加藤 和男	青木 新	尾崎 隆	那和 主計	水野 衛夫	山川 紗歌江	竹村 京子	竹村 卓二
八王子市	鎌倉市	三鷹市	八王子市	新宿区	杉並区	川崎市	国分寺市	鴻巣市	板橋区	国立市	小金井市	桜ヶ丘	小金井市	小田原市	青梅市
蛇の目 電機 株式会社	奥村 正巳	斉藤 文平	田中 義一	富田 澄	田宮 由道	斉藤 悟	小宮山 守一	内島 達爾	長田 正光	中村 静夫	丸山 幸一	広谷 豊蔵	高木 正一	前田 増三	嶋田 卓弥
文京区	飯能市	岩槻市	鎌倉市	川口市	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中央区	山梨県	東大阪市	小金井市	八王子市
伊東 祐義	本橋 進	中田 靱男	船田 榮	山口 政志	武川 文男	山崎 文男	金子 光助	榊原 惣一	山口 友作	武州 商事(株)	蛇の目 電算センター 株式会社(株)	蛇の目 不動産 株式会社(株)	蛇の目 金属工業 株式会社	三光 シン工業 株式会社	蛇の目 精密工業 株式会社



賀 正

飯能市	世田谷区	狭山市	"	兵庫県	飯能市	"	川口市	日高町	港区	"	"	府中市	北本町	浦和市	中央区
宿谷益三	西沢はる	青木佐四郎	青木恒雄	山田晁	田中政三	柳内貞雄	中村福太郎	(株)新堀製作所	伊藤正雄	新妻治郎	日永清	山野辺宗鳳	岡田功	中野政孝	山根春衛
中央区	"	"	"	"	"	"	"	大宮市	"	"	"	"	与野市	大宮市	川口市
清水富雄	丹沢章浩	田中敏	松本四郎	高山重郎	古沢清久	二宮謙三	山田喜志夫	東角井光臣	岩井栄	岩井栄一	柏倉寛一郎	秋山清	天野松之助	左伴定広	大野元美
川口市	"	台東区	大宮市	武蔵野市	"	"	"	中央区	"	新宿区	中央区	千代田区	新宿区	武蔵野市	"
駒場久雄	寺門清志	中西土朗	川守田実	金沢富夫	名店会長 桃沢白吉	支配人 鈴木喜久蔵	宮崎甚左	桃沢白吉	鈴木徳蔵	伊藤広司	和田豊	和田米蔵	田畑米蔵	吉田博宣	宮沢正愛



賀 正

武藏野市	〃	渋谷区	〃	中央区	渋谷区	吉祥寺	目黒区	新宿区	吉祥寺	〃	杉並区	所沢市	神奈川県	杉並区	〃
大野勝二	京極源三郎	岩城二郎	佐々木英造	東条達弥	高山光洋	米倉広人	須藤広栄	望月継吉	三崎きみ	植月忠雄 <small>三信工業特</small>	服部雄太郎	服部雄次	曾我五郎太	高橋一郎	岡田敬司
杉並区	新宿区	北区	江戸川区	〃	〃	〃	足立区	練馬区	〃	調布市	府中市	昭島市	町田市	八王子市	神奈川県
安藤秀三郎	本木幹彦	堀 豊泰	青木平吉	麦倉忠彦	倉林金藏	宮木亨	清水雄治	宇佐美誠	後藤英雄	白山暁	山本一雄	紅林邦雄	塩治寛次	打味崇	渡部敏之
入間市	飯能市	三郷町	市川市	新宿区	入間市	〃	浦和市	静岡市	練馬区	港区	与野市	文京区	川口市	朝霞市	川越市
鈴木和男	小林頼四	武石次男	中 富男	北川教全	東上液化ガス	野口丈夫	稲村坦元	大嶽孝夫	井野雅史	加藤真一	福田忠秀	松本元	小林一郎	青田正雄	磯貝勝之

賀 正

川口市	大田区	〃	中央区	与野市	千代田区	川越市	〃	〃	世田谷区	川口市	北区	世田谷区	飯能市	日高町	大宮市
永瀬謙三	小原満里	宮沢庚子生	山名酒喜男	小林英川	飯野海運	山崎嘉七	沢田政広	神谷志津江	神谷正太郎	大泉寛三	大川鉄雄	小佐野賢治	黒田利平	後藤平吉	蓮見健樹
〃	〃	川口市	浦和市	〃	川口市	浦和市	世田谷区	川口市	大宮市	浦和市	〃	〃	〃	〃	川口市
石川昌	宮寺正	増田友教	斉藤清松	安達栄	金井くに	永瀬清	石川享治	矢沢龍吉郎	増田直道	永瀬孝貞	鈴木はな	永瀬みつ	岩田文雄	岩田三史	増田伸一郎
御申込順により掲載させていただきます。		川口市	京都市	〃	〃	大阪市	大阪府	新宿区	鎌倉市	中央区	文京区	松戸市	〃	川口市	横浜市
		飯塚孝司	木村寅一	南大木	夏川鉄之助	辰野彦一	松下幸之助	黒川倉好	小糸源太郎	右近保太郎	内藤豊次	相台宗次郎	永瀬一郎	増田金蔵	武田恒夫



西遊記（其の十六）

岡部千三

にんじん果

法師は、運ばれてきたものを見ておどろいた。

「どうしたとか、これは赤ん坊ではないか」

「たべていたかどうか、これは赤ん坊ではないかと、はこんできた子供達はちゃっかりして、法師を見上げています。」

法師は、おどろかないではいられない。

「おまえたちは、何と云うことを云うのだ。このような赤ん坊がたべられるか、他に食べものがないわけなし、ああおそろしい……おそろしい」

三蔵法師は、目をとちて心をおちつけようとつとめていた。すると子供達は、にっこりわらった。

「法師さま、どうしてそんなにおどろいていらっしゃるのですか、よくごらんになってください。これは、赤ん坊ではないのですよ、寺の宝物のくだもので、にんじん果と申しまして、それはもう長い長い年月をへて（三千年）花が咲き、次ぎの三千年目に実がなつて

それが三千年たつて、やっとたべられると云う、珍らしいくだものなのです。この万寿山以外には、どこにもないと云われています。ですから誰でもたべられるものではありません、このにおいをかいだだけでも、三百六十年も生きられると云うし、それを食べれば、四万七千年も長生きが出来るそうですよ。思えばふしぎなものです。ですからどうか、たべてごらんください」

「せつかくだがね、えんりよししょう」

法師は、そっぽをむいてことわった。

「どうしてもわしには、赤ん坊にしか見えないのだ。わしは出家の身だ、なんでなんで、人間の子供がたべられようぞ」

二人の子供が何と云ってすすめても、かたく口を閉じて、だまりこくっているばかりである。

「それでは、おすすめいたしません」

二人の子供は、ぼんを持って、部屋から出て行った。

「お客様はどうしてもたべてくださらない。もったいないね、ひとつずつたべようよ」

「うん、それで長生きをしようよ」

子供は、うまそうに、……たべてしまった。一方食事の仕度をしていた八戒は、このようすをみてしまった。どうしてもうらやましくてしょうがない。

すぐに悟空のところへ行つて、この様子を話した。

「兄き、この家には、うまそうなものがあるよ、なんでも、にんじん果っていう、めずらしい果物でね、お師匠さまが、それをどうしてもお上がりにならないものだから、子供たちが、うまそうにたべてしまつたよ」
「それはおいしいことをしたな、われわれをほつといて自分達のはらをこやすとは、ものしらずのやつらだ。八戒、おれたちも考えようぢゃないか、わしについてこい」

兄き、ぢゃあ、やつてみるか」

八戒は自分の手をのぼして、人さし指をちよいとまげ、ものをぬすむかつこうをして、わらつた。

「うん、やるともよ、でお前にもごちそうしてやるぞ」
そして八戒と悟空は、すぐ裏の畑にあるにんじん果の木の下へと、そつとぬけ出して行つた。

悟空はたちまち本性を現わして、するすると、にんじん果の木にのぼって行つた。木の枝になつてゐる実を一つおとした。おちた木の実はどうしたことか、ころころと落ちて、どこにも見えなくなつてしまつた。いくらさがしても見つからない。

そこで悟空は、地の神を、となえごとをして呼んだ。「お前が、にんじん果をかくなしただらう。だったら



すぐに、ここへだぜ、ださないと、ただではおかないぞ」

と云いながら、耳から如意棒をとりだして、ぶーんぶーんとふり廻して、地の神をおどかした。

地の神は、びくびくして、

「わたしが、そんないたずらなどするのですか、お二人の注意がたりなかつたからですよ。にんじん果は手でとつたり、棒などで、たたいたりしてとつてはだめです。下へおちるといつしよに、土の中へもぐつ

てしまいますから、金の棒ではさみとり、絹の布でそれをつつむようにうけとめて、とれば、土の中ににげるようなことはできません。もしうそだったら、もう一度ためしてみられるがよい」

と正直なことを教えた。

「その金でできている棒、どこに、どこにある」

「お寺の……、あのー、おくのお部屋に、たしかしまつてあるわけです」

「いや、いや、そうではないぞ、これ八戒、まづいな」と悟空は、又術をつかって、金の棒のありかをさぐっていた。

もういちど、木にのぼって、なるべく大きなのを、たたくと、にんじん果の実がことん、下へおちないうちに、着ていた服のそででうけとめた。三つとって、
「なるほど、なるほど、これは、いいかおりだ、沙悟浄……ちよつとここへこい」

沙悟浄にも一つ、八戒にも一つやって、たべてみた。

「ふしぎな味だな、どうだ、八戒、このあじときたらまったくはじめてだな」

「だけどな、きょうだい」

八戒はつまらなそうな顔つきで云った。

「たった一つじゃ、味はわからないよ。一口でのみこ

んでしまったもの、すまないけれどよ、もういくつかつとつてくれないかい」

「よくのふかい野郎だな、珍らしい宝もののようなこの果物のことを、もったいらしく教えたのはお前じゃないか」

ふたりの子供は、悟空や八戒が、何やら話しているので、これはへんだと思ひながら、そつとにんじん果の木の下へ行ってみると、これいかに、いくつもの足あとがある。そればかりではない、木の上の実を教えしてみると、どうしても四つとられている。

「さあ、さあ……たいへんなことになったわい。にんじん果がとられている。にんじん果をぬすんだやつがいる。あきらかに、あの三人にちがいない」

「ほかから来るようなことは考えられないことだからそれにきまっている。おーい、その三人さん、法師さまのおでしさん。にんじん果をぬすんだらう」

二人の子供は、悟空たち三人に、すぐんでつめよつてきた。

悟空は、そしらぬ顔をしてそつぽを向いている。八戒は何かてられているような顔でにやりになつてきている。悟浄は、きまりがわるいようになつこうでうつむいているばかりである。三人は益々あやしくなつた。

二人の子供は、こうたいで、わる口を云いはじめた。

甲「だまりんぼうのぬすつとう」

乙「おおちやくものどろぼうめ」

その声が、いつか、三蔵法師にきこえていた。

「悟空、八戒、悟浄」と法師は、りんとした声でつづ

けて呼んだ。

「さては、お師しようさまに、知れたか、これはま

いことになってしまったわい」

悟空は首をすくめてきた、法師がおこると、じゆも

んをとなえる。すると例の金の輪が頭でしめつける。

おれるようにいたむ、またそんな目にあわされては

と思うと身も引しまり、首がすくむのであった。

そこで、八戒と悟浄に、又わるいちえをつけなけれ

ばならなくなった。

「だいじょうぶだよ、きようだい。お師しようさまが

何をきいても、だまって何もしゃべるではないよ。口

がさけてもな、わかっただかな」

「うん、きようだいがその気なら、おれたちそうする

よ、なぬ悟浄」

「ああ、そうよ、どこまでも、そうするよ」

すつかりうちあわせが出来てから、三人ぞろって、

法師さまの所へ行つて、その前へちょこなんと並んだ。

「お前たち、心ががめるようなことをしたではない

か、子供たちがおこつていたようだが、なぜおこつた

のだらう……、誰かわけをしらぬか、なせ返事をした

いのだ」

法師の聲は、いつもと変りがない、けれども、どう

も三人の胸にはつきささるようである。

「わたしは存じませんよ、ぬすつとなんてとんでもな

い。にんじん果なんて見たこともないものです。ほか

のものしわざでしょう」

悟空が、ぬけぬけとしやべつているところへ、二人

の子供が、とび込んで来た。

「うそをつくな、にんじん果をとつたのはおまえでは

ないか」

すごい顔をして、まっかになつて悟空をゆびさした。

「ぬすびとは、たしかにそのさるです。おちいありま

せん、ほかの二人も、にんじん果をたべたなかまです」

法師は、かなしそうに三人をじつとながめていた。

「それがほんとうなら、おまえたちば、なせけない。

わたしが仏さまにつかえ、羅文をとりにいくと云ふこ

とは、よく知つていゝではないか。その途中で、ぬす

みなどをばたらくとは」

法師の目に涙が光つた。

(以下次号)



田舎医者 見川鯛山 (其一)

はしがき

夏には、毎年那須に行きます。

高原の宿(木樵小屋)は古い大きな民家の荒削りの太い柱や梁に、藁や熊の皮等、色々と無造作に置いてある民芸風の建物で、御主人の見川先生はお医者様ですし奥様は品の良い親切なお方です。

そして老人の好む山菜料理や川魚等何より有難く、那須高原特産のトーマロコシを焼いて下さるなど、親しみ深い上に、お医者様おかかえの老人にはもって来いの温泉旅館です。

見川先生は大変な釣天狗の上に、ゴルフ、狐等多趣味の方で、お話しにも花が咲きます。

殊に文章がお上手で先生の著書の序文に、獅子文六先生が「土の中から生れて来たような農村の人物がイキイキと描かれている。それがかもし出すユーモアが又非常に魅力がある」とほめておられる如く、中々面白いので、見川鯛山先生書「田舎医者」中から転載させて頂く御許しを頂きました。

祝賀会

朝の外来患者をすませると、私は池沢部落の公民館落成祝賀会へ出かけて行った。

青いトタン屋根で、モルタルを塗った木造の白亜館が村いちばんの近代文化を誇って、田圃の原っぱに建ち、そのまわりで桃が満開だった。那須高原は今や春らんまんである。

その受付で、役場の書記が私の胸に大きな造花をかざりつけ、ビン詰の酒と、弁当をくれた。まだほかほかとあたたかい弁当だった。

私は来賓席へ案内され、その末席の椅子に腰をかけた。会場は強いペンキの匂いと、人いきれで息ぐるしかったが、窓を開けると、すぐその桃の花の中で、鶯がいい声で鳴いた。

とっくに演説は始まっていた。演壇の男は婦人服みたいな派手な柄の洋服こそ着ているが、四角い真黒な顔が大きすぎて醜い男だった。

だがその喋りかたは、実に堂々と立派で、満員の会場をすつかり威圧していた。男はその方がいいのだ。壇上の彼の後の壁には細長いビラが下がり

——近代農村婦人の心構えについて——垂見薫先生と大きく書かれてあった。

感心して見ていたら、書記がソッと私に教えてくれた。「あのかた、県会議員さんで、栃木県婦人同盟会長の垂水先生です。本県での名流夫人です」

「おんなかね、あの人!!」思わず私は言ってしまった。「さようです。そしてあのかた、北那須市の駅弁会社の女社長さんです。きょうのお弁当はあのかたが全部ご寄附くださったんですハイ」と、書記が涙ぐみながらお辞儀をした。

「いい人だ」私は彼女の演説を聞こう。だが会場はガヤガヤとうるさかった。赤ん坊が泣くと、おかみさんが胸をあけてその口に乳房を突っこみ、走り廻る子供たちを土方のような声で叱った。そして親爺どもは、もう酔っぱらって、空缶の灰皿をキセルの雁首でひっぱたき、二合びんをラッパ呑みしてめいめい勝手に祝賀の宴を始めていた。だから、垂水薫先生は負けずに怒鳴った。

「若い世代と古い世代のその中間にあって、いつも良

き助言者であらねばならんのが、これすなわち我々母であり妻であらねばならんのである。アメリカへ渡米して、第一番に私が感じた事は………

先生がふるいたってテーブルを叩くと、いっせいに赤ん坊が泣きだした。たぶん虫が起きたのである。

するとまた先生が怒鳴った。

「演説中ですぞ!!赤ちゃんを連れ去りなさい。もうじき終りに近づきつつありますぞ、皆さんどうぞ静しくにしなさい!!」命令がくだると、へべれけの親爺どもさえ先生の電気に撃たれ、故障した活動写真のようになりびたつとその動きをとめ、赤ん坊はとっくにひきつけを起こして泣きやんでいた。

会場が林のように静かになって、再び先生の演説が続いた。すると幾百のお客さんたちは、誰も彼もすっかり精根がつき果てて、力なく肩を落し、ため息ばかりついた。ふと向う側の来賓席から、村長が私に何やら合図を送りはじめた。彼は垂水先生に見つからぬようにそっと彼女を指さし、その手を忙しく振りまわすと、最後に金歯だらけの自分の口をバクバクさせるのだ。そのしぐさを、私がたんねんに読みとると、それは実にひどいことを言っていた。

私に、壇の上へ登って行って垂水先生の頬っぺた

を撲りつけ、引きずりおろしてから噛みつけ”と言うのだ。

「まさかそんなこと、私にアとても出来アしない」と、こつちも手を振って合図を送ると、村長が書記に耳打ちをして私のところへ伝令によこした。

「村長さんは、あなたに垂水先生の演説のあとで、ひとこと祝詞をのべていただきたいそうです」と書記が意外なことを伝えるのだ。私は村長に渋い顔をしてみせて、「いやだ!!」と言った。するとまた村長が手で十二時を示し、二本の指を箸にして、バクバクと口へ持ってゆく、「私にめしを食え」と言うのだ。私はにこにこして、さつそく弁当の包みを解きはじめた。

その時、書記が再び、大いそぎで走って来て私に告げた。弁当の事ではありません。まだ食べては駄目です。村長さんは、あなたにさつきからこう合図なさってんですよ、この演説のあと十二時のお昼まで、ちょっとでもいいから何か喋るようになって……私はもう決して、村長とジエスチャー遊びなんかしなかりうと心にちかかった。時計を見ると、間もなく昼だった。そして垂水先生の演説はまだまだ続きそうである。

「さあて皆さん!! 以上のようにお話した次第であり

ますが、私はここで皆さんの御質問にお答えしようと思うのであります。さあどうぞ、どなたでも結構です、ご質問ありませんか?」

と先生がじろつと会場を見廻したが質問はなかった。もし誰かがここで手をあげて質問でもしたら、その男はよってたかつて吊し首に逢うところだろう。また先生が言った。「質問いいですか!! じア先へ進みます。私は結論といたしまして、私はいかなる場合に於ても、皆様のよき代弁者たらんがために、次期県会にも立候補を決意しました」

「垂水薫は皆様の公僕として、農村主婦の幸福のために、男性の横暴に一戦をいどまんとする覚悟でおるのであります!!」

その時、私の一人置いて隣りにいた衛生課長が身を乗りだしてそつと私にささやいた。

「妻え女だな先生。奴の亭主どんなんだべ?」

「気の毒だね」

身につまされて私が言ったら、間に坐った神士が痰のからまったかすれ声でかすに言った

「私がある……あれの亭主なんです」

遠くサイレンが鳴った。やつとお昼だ。私はにこにこしながら弁当を開き、口で割箸をブチンと割った。

救世大観音落慶

壱万體観音奉安

式無事終る

待ち望まれていた、落慶式も十一月十一日、小春日和に恵まれて執行することが出来ました。紅葉も真盛りで米山の方々は、口々に陽に映えた色を、ほめたたえられました。

予定の十時三十分、三蔵塔前から、祝旗を先頭に、稚児、御詠歌の梅花流会員、僧、平沼開祖夫妻、大導師、曹洞宗大本山総持寺管首岩本勝俊猯下、興文丈、服部太元、別所龍城、有馬忠直、石塚大喜五老師外十名の諸師、来賓と云う順に長い行列が進められました。行列の沿道には大小の風船が間をおいて揚げられ、その色どりも緑樹の中にくっきりと浮んでいました。すでに観音前庭には参列の方々があふれるばかりに隙間なく詰められて身動きも出来ない程でした。

十一時式場中央に大導師岩本猯下がお着きになると、西村輝成師の司会によって、直ちに開眼の儀が行なわれます時、一同緊張のうちにそびえ立つ大観音の慈眼を仰がれた様はげんしゆく、感激そのものでした。次いで壱万體観音の奉安を祈られて、読教に入ると



岩本猯下の点眼



平沼開祖のあいさつ

三ヶ所で焼香が次々とされました。その間堂宇内の参拝が進められましたが、千六百名に及ぶ参列者なので混雑の状況を見乍ら入堂をしていたいただきました。

焼香が終了後、狛下の御垂示があり、次いで来賓代表として、船橋ヘルスセンター社長山根春衛殿、埼紡社長飯塚孝司殿、全日仏婦事務局長船口暉子殿から御祝辞を賜りました。

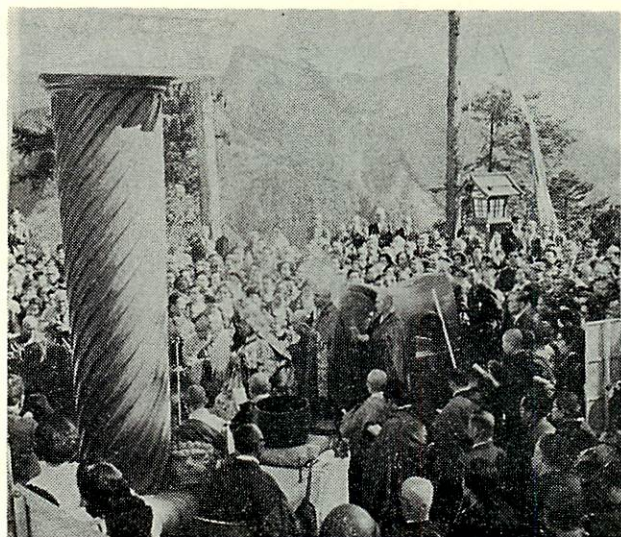
続いて建立に当って協力された三信工業株式会社、服部雄太郎殿外二十八名に感謝状や記念品の贈呈があり、最後に平沼開祖から九拝しての謝辞が次の通りべられました。

「本日は皆様御承知の通り「世界平和記念日」に当りますので、之に因縁の深い救世大観音の落慶式を挙行致しました処、皆様には非常に御多忙の上にこの山奥迄御遠路御来臨下さいまして感激の至りです。茲に皆様の厚い御信仰心に対し九拝御礼申上ります。

御蔭をもちまして、曹洞宗管長岩本狛下御導師のもとに盛大に且、敬肅に取り行われまして有難う御座いました。

不肖私は八十才になりましたので、数年を要した此の救世大観音建立の悲願が達せられて、全く感無量な

ものがあります。茲に今日迄およせ下さいました皆様
の御指導と御好意に対し衷心より御礼申し上げます。
御来山下された皆様は一万体観音を御奉納下された
有縁の方々であります。定めし御先祖様は御孝心深き
皆様に感激して居られましょう。そして此の風光明媚



式場の参拝者各位

な靈地に於て、阿弥陀如来や、救世観音にあたたかく
いだかれて、極楽往生の喜びを満喫して居られる事と
存じまして、私は良い事をしたと感激して居ります。
定めし皆様も、私同様御喜び下されて居る事と恐察申
上げます。以下略

十二時十分予定通り式は終了しました。

この時谷間からは花火の早打ちが空にとどろき、無
数の紅風船が一時に飛ばされて秋空高く舞い上がった
様には、一同感嘆しておられました。

お中食は式場右下の台地に建てられたバンガローで
引換えていただきましたが、屋内や落葉の積った林内
や、紅葉ま近に名栗谷を見おろせる眺望のよい場所を
ここかしこに求めて、今日のために与えられたよう
な、小春日和の中で、さまたのしそくに中食をとって
おられました。その様子を、海拔五百米の山頂から、
今開眼された救世大観音が、ほほえんでおられるのを
真近に拝しながら、そして又食後山内をそぞろ探勝な
さった方が沢山おられました。

とりひ 第二十一号 発行日 昭和四十七年一月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居親音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居親音 電話〇四二九七〇四名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



新年祈禱会のご案内

救世大観音の落慶式も終えて、初めての新年祈禱会で、意義も深い年です。どうぞ、一年の計は正月から、そして信仰を通じて、たくましくよいお年でありますよう、ご利益をお祈りください。

- とき 1月1日～3日まで10時より(其他常日でも受付)
- 願意 家内安全・病氣平癒・試験合格・安産・商売繁昌・交通安全
- 申し込 12月末日まで、鳥居観音寺務局へ。
- 祈禱料 金五百円 千円 弐千円
(壹千円以上には交通安全お守ステッカー贈呈)

今後の供要会

- 月例法要
毎月17日
- 本堂法要
- 三蔵塔法要
- 壹万体法要

除夜の鐘

- とき 12月31日
午後 11時40分
より
- ところ 本堂
堂内に参列読経に合せて、百八の鐘をきく時行く年来る年を心から祈ります。

節分会

- とき 47年2月
3日16時
より
- ところ 本堂
福は内 鬼は外となえながら豆蒔袋に入れた福豆を来山の方にさし上げます。